

論文特集「HAI (Human-Agent Interaction)」の発行にあたって

角所 考
(関西学院大学)

片上 大輔
(東京工芸大学)

本特集号は、2010年11月号 (Vol. 25, No. 6) に続いて、本学会論文誌で2回目となる HAI (Human-Agent Interaction) の特集号である。HAI におけるエージェントという用語は、いわゆる擬人化エージェントだけでなく、人やロボット、計算機、さらにはぬいぐるみや愛着のある道具のようなものまで、人が自らのインタラクションのパートナーとして、何らかの擬人性や存在感のようなものを感じ得る対象すべてを広く含意するもので、そこには、人がインタラクション対象を擬人化する要因や利点、その活用のためのインタラクション設計の方法論などを、インタラクション対象のカテゴリーに依存しない普遍的な観点から議論しようとするねらいが込められている。HAI に関する解説は、学会誌に過去何度か特集があり (Vol.17, 21, 24, No.6)、本号の学会誌にも再び特集されているため、ここでは詳しく述べないが、個々の研究発表も、国内では本学会も協賛している HAI シンポジウム、国外では関連する国際会議のワークショップなどをそれぞれ中心として活発化・多様化しつつあり、本論文誌特集号は、そのような研究を学術論文として特集すべく企画したものである。本特集号への投稿論文の編集作業は、末尾に記載した特集号編集委員会が担当した。

HAI では、AI の本質である知能の特徴をインタラクションの観点から捉えようとする科学的・工学的な姿勢を土台には置くものの、議論の焦点が人とエージェントとのインタラクションにあるため、その各状況にはさまざまな文脈が不可避免的に伴い、その影響を厳密に分類・統制することが難しいことから、研究成果を学術論文としてまとめる際に、客観性や一般性の高い実験結果を十分に提示することが困難な場合も多い。そこで本特集号の編集にあたっては、本学会の論文の編集規定に忠実に従いつつ、このような事情になるべく配慮した論文の評価を心掛けたつもりである。論文誌特集号の編集作業では、短期間に多数の論文を集中して処理することが求められるため、各編集委員は自分の担当論文の編集作業だけで手一杯となってしまう、担当以外の論文に関する議論への関与が手薄になりやすいことから、本特集号では、編集委員長に副編集委員長と編集幹事を加えた幹事団の陣容を手厚くし、各論文の判定に関する議論には、この

幹事団が中心となって注意を行き渡らせることにより、各編集委員の負担を軽減しつつ、編集委員会での議論を充実させることを意図した。もちろん、投稿論文を最も丁寧に読んでるのは査読委員や担当編集委員であり、基本的にはその判断を尊重したことはいうまでもない。

以上のような編集作業の結果、20件の投稿論文のうち12件が採択となり、採択率は60%と比較的高い数字となった。論文誌の採択率は高いほうが良いわけではないが、この数字を見る限り、前述のようなこの分野の事情が不利に働くことはかなり避けられたのではないかと考えている。採択された論文の内容も、エージェント自身の動作計画から人とのインタラクションにおけるバーバル・ノンバーバル表現の認識や生成、さらに人によるエージェント性の認知や個々のユーザの好みへの対応、ユーザへの教示や教育への応用など、HAI に関わる幅広い話題を含むものとなっており、読者の方々の研究に多少とも貢献できれば幸いである。

最後に、本特集号の編集にあたっては、上のような編集体制を敷いたこともあって、担当編集委員の方々には追加の対応をお願いしたことも多く、お忙しい中大変お世話をお掛けした。また査読委員の匿名性を維持するため、誠に恐縮ながら具体的なお名前をあげさせていただくことは控えるが、査読委員各位にもご多忙中多大のご協力を賜った。ここに衷心よりお礼を申し上げる次第である。

HAI (Human-Agent Interaction) 特集号編集委員会

編集委員長：角所 考 (関西学院大学)*

副編集委員長：竹内勇剛 (静岡大学)

編集幹事：片上大輔 (東京工芸大学)*、石井 裕 (岡山県立大学)、小松孝徳 (信州大学)、寺田和憲 (岐阜大学)

編集委員：尾関基行 (京都工芸繊維大学)、桂田浩一 (豊橋技術科学大学)、加納政芳 (中京大学)、菊池英明 (早稲田大学)、久野義徳 (埼玉大学)、堂坂浩二 (秋田県立大学)、中村剛士 (名古屋工業大学)、西山高史 (パナソニック電工)、前田陽一郎 (福井大学)、村川賢彦 (富士通研究所)、湯浅将英 (東京電機大学)

(*は学会誌編集委員兼任)